

山谷を支える、人の「つながり」

「怖い」。

足を運んで私たちが抱いた山谷の印象だった。台東区、荒川区の中間に位置する山谷。大通りを歩く限り、目に入るのは一般的な住居や小学校。何の変哲もない普通の下町。しかし一步路地に入ると、そこには暗く、重苦しい空間が広がっていた。古びた宿が連なり、売店やコインランドリーが点在する。そんな狭い通りには、着古した服を来た年配の男達が溜まり、異質なものを見るような視線を投げかける。住民でない我々が、足早に通り過ぎたいと思うような場所だ。

山谷は、江戸時代から安宿の多い地区であり、戦後復興期には地方から仕事を求めてやってきた肉体労働者が集中した。「ドヤ」と呼ばれる安宿で暮らすホームレスや日雇い労働者の溜まり場となった山谷では、アルコール中毒者・薬物服用者・暴力団などが横行した。喧嘩や暴力沙汰が絶えず、警察や自衛隊の制止が及ばぬほど荒れていたと言う。それでもここ 10 年の間に、山谷は以前のような荒れた土地ではなくなった。その背景にはある施設とその創設者の見えざる努力がある。

NPO 法人「きぼうのいえ」——ドヤ街に佇むこの小さなホスピス——がこの町を少しずつ変化させている。今では「山谷の後見人」と言える創設者の山本雅基さんは、10 年前に山谷で炊き出しに参加していた時、ある思いを持った。

「その日その一食を提供することはできても、いずれにせよ知らぬ間にどこかでのたれ死んでいくことには変わらない。人の死に方はそんなことでいいのだろうか」。

彼は、日雇いで働き、ドヤ街で孤独に死を迎えるホームレスの実状に気付いた。山谷で暮らす人々との関係を「その場限り」で終わらすのではなく、「つながり」を重視したい、彼らが満足してその生涯を終わらせることができるようにしたい、そんな使命感から、かつては実現が難しいとされてきたホスピスの建設を決意した。完成までに必要な 2 億円もの資金も調達した。そして 2002 年、「きぼうのいえ」が創設された。今では入居者が殺到し、入居までには 3 ヶ月待たなければいけない程の需要がある。このような人気を得ているのは、やはりそこでの暮らしが充実したものであるからだろう。

以前路上生活者だった A さんは入居当時、ちょっとしたことで激怒しては暴れていたという。しかし、山本さんや他の居住者、ヘルパーと暮らすうちに、人間の温かみに触れ、とても穏やかになった。哲学をはじめあらゆる本を読んだ。そして A さんは最後を迎えるとき、死への不安が消え、笑顔で旅立った。学ぶ楽しさを覚えた A さんは、

死後の世界を前向きに捉えられるようになったのかもしれない。山本さんの願いどおり、Aさんはその生涯に納得して幕を下ろすことが出来たのである。

ここ十数年で山谷の治安が良くなった背景には、男性だけでなく、女性の支援者が増加したことも大きく関連していると山本さんは言う。山本さんも、女性介護士の団体を設立し、ドヤ街で暮らす人々のもとに派遣している。社会や家族との縁をなくした路上生活者に対し、彼女たちは、介護士の業務を超えて彼らをサポートしている。愛情に飢えた居住者たちの子供らしい要求を受け止め、心を開かせ、人間らしさを取り戻す手助けとなっている。

山本さんは、このホスピスを拠点に、人々が満足して死を迎えることのできる場所を創ることを理想とし、今まで10年以上活動を行ってきた。今後はこの活動を国全体に広げていきたいと考えている。山本さんのような草の根の活動が一市民としての活動に留まらず、進行する無縁社会に歯止めをかけるのではないか。今後地域開発が予想される山谷とそこに住む人々がどのような歩みを見せるのか、その経緯を見守りたい。